

---

# 僕らは青春妄想族

花想

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕らは青春妄想族

### 【Zコード】

N1807A

### 【作者名】

花想

### 【あらすじ】

青春とはなんとも素晴らしい響き。ここに青春真っ盛りの三人の男子高校生の日常がある。ハイテンションでバカ丸出しのキティ。クールで冷静なあいちゃん。優しくて可愛いボイラ。三人の高校生活をここに綴る。

## 第1話 暑さ寒さも彼岸まで

「うあー…あーちー…」

うだるような暑さのこもる体育館で高橋俊也（通称・キティ）は右手でパタパタと顔をあおぐ。視線の先にはテカテカと光る校長の頭。今日は全校朝礼なのだ。

「なあなあー！あいちゃんー！あのハゲなんとかならんのか？！」

あいちゃんと呼ばれた男子生徒（本名・加勢愛斗）は、ダルそうに振り向いた。

「…話しかけんな。暑い。」

あいちゃんはそれだけ言つと、またダルそうに前を向く。キティは唇を尖らせて今度は後ろの男子生徒に声をかける。

「おい、ボイラーーなんか少しでも涼しくなる方法は無いんか？」

ボイラ（本名・三浦大和）は困った顔をして言つた。

「えつと…少しでも風の通りがよくなれば涼しくなるかもね。」

この言葉に納得したキティは前を向いた。少しでも風が通ればいい…その言葉を頭の中で反芻していたキティには、ある名案が浮かんだ。

風が通らないのならば風を起こせばいいのだ  
キティはおもむろにフウフウと息を吹き出した。熱いものを冷ます  
ように思い切り息を吹く。キティは息を吹くことで風を起こそうとしたのだ。

「生暖かくてキモイ。」

あいちゃんが振り向いてキティの頬をつかんだ。

「うーらんりよ（な…なんだよ）」

キティは思い切り頬を両手で挟まれて息を吹けなくなつた。

「お前の息が首にかかる。キモイし暑いしウザイ。上向いてやれ。  
あこちゃんは手を離すと不機嫌な顔で前を向いた。

それから30分間。キティは上を向いて息を吹きつづけた。あまりにも力いっぱい吹きつづけたので朝礼が終わる頃にはキティは酸欠状態に陥っていた。

「では各自、自教室に戻つて10分後には…………」

ギティはそこまで闇くと倒れてしまつた。エラリと世界が回る。体に力が入らない。

一五八

喜怒の漏息と共に土手への体は体育館の戻は無い——いた

後ろに一隻ボートが荒れて走り去る

「おい…床つて冷たくて気持ちいんだぞ…」  
彼にはいたホワイテが慌ててキティの頭を起した。あいだやんは呆れたという顔でキティを見ている。そんな二人をぼやけた視界でとらえたキティがニッコリ笑いながら言った。

「ニニイロトボシ」

田を開けると、やじじこむ心配やうなボイドと冷めた田つきのあこが  
やんがいた。

キティはいつの間にか保健室のベッドに寝かされていた。

「……なんで俺は」んな快適な場所にあるんぢや

何か起つたのか全くわからんらしいキティは勢い良く起き上がり

卷之三

「そ。俺は、おなば」風呂足湯の鶴、「我が脚を削る。

たん  
だ

キティの頭に激しいツツコミが入った。

「バカ。お前の息で風なんか起こるか。

あいちやんがケルに言い放つ。

なんだよう!! 誰のおかげで今こんなに冷房がきいた部屋に存在

リテラシーディレクション

自慢気に言い放つキティは、すっかり健康体に戻っていた。

そうして暑い教室に戻ったキティは蒸し風呂のよつな甘しさを感じながら、ある決意を固めていた。

「これからは朝礼で倒れることにする」  
快適を得る為なら自分の身を粉にして動く。嗚呼、青春時代真っ盛り！――――――――――

## 第1話 暑さ寒さも彼岸まで（後書き）

はい！初めまして！！花音と書いて「カノン」と読みます。いきなりおバカでスイマセン。。夏なので読んで楽しくぶつ飛んだ小説を書きたいと思いました。これからもぶつ飛んで書いていきますので、よろしくお願ひします。

## 第2話 俺の周りはバカばかり（前書き）

とある日曜日、あいちゃんの休息の邪魔をするものがありました。  
ありがた迷惑な訪問者は・・・

## 第2話 僕の周りはバカばかり

今日は日曜日。学校が休みで何も予定がない日曜は夕方まで寝る。あいちゃんは寝るのが大好きだ。目を開けているとダルイ。ハイテンションショーンでバカなキティとも今日は関わらないで済む…と思つていたのに。

レリリリリリリリ

や、わからぬ」——ほんの携帯電話、画面上にはバツキリ——キ元

תְּאַלְיָה

「圖書」ノヤ

くだらないギヤグを咳きながら、あいちゃんは自分の枕の下に携帯電話をしまいこんだ。つまり拒否だ。せっかくの休日をバカに台無しにされてはだまらない。

しかし、いつこつこ鳴り止まない。あいちゃんはモソモソと携帯電話を取り出すと電話に出た。

「はい」

あいちゃんが話すと受話器からは甲高い裏声が聞こえた。

もしもし？？あたしキテイちゃん、今、あなたの家のエアの前にいるの。」

悪夢だ。あいちゃんは黙つて電話を切つた。だからバカは困る。いきなり家に来るのだから。

「はあーいーー！あら俊也君と大和君じゃん。愛斗の部屋わかるよねーーどうぞーー！」

姉は愛想良く一人を家に上げた。これだからイヤだ。あいちゃんの姉（唯子）はすごく美人だ。色んな人から羨ましがられる。しかし弟の目から見れば美人だがキティ並みのバカだった。あいちゃんが寝ていることなど微塵も頭には無いだろう。

「はよつすー！俺からの電話を無視しようとするとは…無駄な抵抗だなー！」

勢い良く俺の部屋のドアを開けたキティは信じられないテンションだった。コイツの脳みそはゼリードできているに違いない。大和は二口二口と楽しそうに微笑んでいる。コイツの脳みそは花畠だ。

「…で、何か用件があるんだろうな…？」

用件がなければぶつ飛ばす。いや、あつてもぶつ飛ばすのだが…。

「そりゃそうだろうよ相棒…！」

相棒ではない、といづらシツコハめんどくさいので黙つて田をそらした。

大和を見ると、すっかりくつろいでいて、寝転んでマンガを読んでいた。

「大和…お前協調性無さすぎや…」

俺が言うと大和は一言

「一応話は聞いてるからイイだろ。」

と言つた。いや、良くないと思つ…がめんどくさいので放つておいた。

「なんだよー一人ともー！俺がせっかく良いこと考えたのにさあー…キティの思いつくことに良いことなんてあるはずがない。

「名づけてー！ 出会い系 with アバンチュール inner sum me r だ！！！！！」

嗚呼、またバカが始まつた。題名で理解できる。出会い系で一夜のアバンチュールを過ごす計画だ。そんなことだらうと思つた。

「俺は、この夏にチエリ・ボ・イを脱出するー！！！」

意氣揚揚と片手を挙げたキティにボディプロ - が入つた。しかも精神的に。

「俊也くん…まだチエリ・ボ・イだつたんだー！！！」

声の主は、あいちゃんの姉の唯子だ。唯子がクスリと笑つてジユ - スとケ - キを置いて部屋から出るまで、キティは固まつたままだつた。それを見たあいちゃんは

「バカを静めるのに一番効くのはバカだ」と悟ったのだった。

嗚呼「れだから青春つてやつはさあ……！」

## 第2話 俺の周りはバカばかり（後書き）

はい！すいません！！1話で作者もバカだつて丸出し。。だつて  
自分のHN間違つてんだもんよ。本当にバカでごめんなさい。。花  
想でカノンです。どうぞ改めてよろしくお願ひします。はい。  
。。

### 第3話 神様、俺に行動力を（前書き）

ボイラは実は天然キャラだつたらしい・・・

### 第3話 神様、俺に行動力を

「じゃ……じゃあキティの家行こうよ……」

固まつた後、落ち込んでしまつたキティをなんとか戻そつと俺は場所を変えるよつ提案した。

「そうだな。ボイラの言つ通りだ。俺の部屋は狭いし。」

あいちゃんも慌てて同意する。

「あ……今日はオイラの兄貴と姉貴がご在宅だぞ?…それでもかまわんのか?！」

キティのテンションはまだ低い…と言つても普通の人なら十分高い状態なんだけど。俺達は頷いてあいちゃんの家を出ることにした。玄関の所でキティは唯子さんに「がんばってね!…」と言われていたが、面白いので見ていた。

そうして俺達はキティの家まで約10分の道のりを歩き始めた。そう言えば、まだ誰も自己紹介してない…といつか作者が「どうすれば良いかわからん」と嘆いてたから、ここでちょっと自己紹介etc…。

キティ（本名：高橋俊也） ハイテンションの申し子 のっぽ

童貞 オシャレメガネ愛好家

あいちゃん（本名：加勢愛斗） 男前 めんじくさがりや 嘸煙

愛好家 クール 彼女有

ボイラ（本名・三浦大和） 童顔 チビッコ マイベース 家は

自営業

こんな感じです。そういう言つてゐるうちにキティの家に着いた。

「相変わらずデッケンなあ……」

あいちゃんが珍しくアホ顔で言つた。キティの家は金持ちだ。家は豪邸つつうか城だ。貴族の城みたいな家に住んでる。きっと並外れた金持ちだからこそ、こんな性格に育つんだろう。可哀相に…

・（鼻笑）

「さあ入りたまえー！」

キティがドア（ライオン付き）を開けるとそこには・・・・山のようにキティちゃんがいた。

キティのお姉さまはキティちゃんマニアだ。そして並外れたヤンキーでもある。

これがキティのあだ名の由来だ。

「数が多くすぎて姉貴の部屋だけでは納まらなくなつたのだーーー何故かキティは家に帰ると堂々としている。お坊ちゃんまだから家では偉そうなのかもしれない。壁一面にはたくさんのキティちゃん。しかも等身大のばかり。ぶっちゃけ怖い。ものすごく見られてくる気がする。なんで体重がリンク三個分のキティちゃんがこんなにデカイのだらう。

「俺の部屋に直行コ・スと森のくませんコ・スとカモメの水兵さんコ・スどのがいい？」

意味不明だ。全くもつてわからん。

「直行コ・スでーーー」

基本的に金持ちの考えは恐ろしいのでおとなしく（むしろ普通）直行コ・スにした。

そうして俺達は「直行コ・ス」（手書き）と張り紙のあるエレベーターに乗り込んだ。

「・・・・お前ハナワクんだな・・・・」

エレベーターに乗るといきなりあいちゃんが呟いた。

ボケたのか？！感想か？！これはツツコムべきなのか？！キティがハナワくん・・・・じやああいちゃんは男前の大野くんあたりか・・・つてか俺は何だ？！ハマジ・・・・いや藤木くん・・・・むしろブ・太郎かブウ？！

俺の心の葛藤をよそにエレベーターは3階（キティの部屋）に到着した。

二人は平然とキティの部屋に向かう。俺はといつと

「くそつ・・・・ずばりそうでしょうーーーってツツコムべきだつ

た・・・

と後悔の嵐の荒波に揉まれながら

· これからは当たつて砕ける精神でツツコミを ·

そう心に誓つたのだつた。

### 第3話 神様、俺に行動力を（後書き）

はい！！なんか進行遅くてすいません。。これでも精一杯生きてます（焦）宜しければ感想やご意見下さい。日々精進いたしますので・・・お願いします。。。

## 第4話 俺はRPGでは剣士だ（前書き）

キティの家にはどうやらラスボスがいるらしい。・・・心して読まれ  
よー。

## 第4話 僕はRPGでは剣士だ

「オラ、入った入ったあーー！」

一人でブツブツ言つているボイラを横田（愛するが故の放置プレイ）キティは自分の部屋に入った。キティの部屋は広い。なんたつて3階全てがキティの部屋なのだから。

「キティさあ・・・こんな広い部屋で寂しくないの??」

ボイラがウルウルした瞳を向ける。

「なんつもーーむしろ王様気分だぜーーつかなんでボイラそんな捨てられた子犬みたいな田でオイラを見つめるんじゃーー！」

キティが言つと、あいちゃんどボイラは一瞬キヨトンとして見つめ合つた。

「なんだよ。可愛いじゃねえか。」

あいちゃんの一言にボイラははうつむき加減に赤面する。

きしょい。いやマジで。ここからハーデゲイになつたんだ。

・・・

キティは抑えられない寒イボと悪寒に肩をすくめつソファにV.I.P座り（三人掛けを一人で使う）して携帯電話をひらいて規模の大きい有名出会い系サイトをひらいた。

「よっしゃーー気合入れるゼ野郎共ーー！」

あいちゃんどボイラにも強制的に同じサイトをひらかせた。

「俺はこの夏こゝで童貞を卒業するーーーーお前らも俺に協力してくれーーー！」

キティは戦隊ヒーローの赤レンジャー（基本的にリーダー）並に爽やかな笑顔を演出した。

「ムリ。」

あいちゃん即答。

「即答すんなよーー仲間だら??.緑レンジャーーーー！」

あいちゃんシカト。

「お前は大親友だよな？？ピンクレンジヤー……」「

ボイラ笑顔で頷く。ピンクレンジヤーに不服は無いらしい。

「せつかくだから協力してあげようよ……ね？？（ウルウル）」

ボイラの可愛らしい説得（色仕掛け）により、あいちゃんはものすごく嫌々協力することになった。

「じゃあまずイイナつて思つ子にかたつぱしからメール送るうぜ！

！選考基準は君達に任せる！」

キティはそれだけ言うと力チャ力チャと携帯電話のボタンを押し始めた。

一時間後・・・黙々と携帯電話操作を続けるキティをよそに、二人は飽きていた。

「なんだよ！！お前達正義の心を裏切るんか！！」

あいちゃんシカト。ボイラは半寝。キティ必死。

「あいちゃん！！オイラにも愛を持つて接してクレヨン！！」「..

キティの攻撃！！あいちゃんは全くダメージを受けていない。ボイラは眠っている。

「ムリ。俺の愛は全てアント一オ猪木に捧げた」

あいちゃんからの攻撃！！あつけなくキティ死亡。ゲ・ムオ・バ-

！！

オラ死んじまうかと思つたぞお（声・悟空）

携帯電話が鳴った。しかもドラゴンボーリ仕立て。ボイラの携帯だ。

「あ・・・メ・ルきたみたい！！」

どうやら出会い系の女の子から返信が返ってきたらしい。

「沖縄の同じ年の子からだあ！！」

キティとあいちゃんがボイラの携帯を覗き込むと、そこには・・・

「ざわわ

とだけ書かれていた。

「・・・ボイラ・・・一体何で送つたんだ？？」

さすがのあいちゃんもハテナ顔だ。

「え？？・・・ざわわ・・・って送つたんだよ！！！」

笑顔で答えるボイラをキティは抱きしめたくなつた・・・が、気持ち悪いのでやめた。

チャ - チヤ - チヤ - チヤ - (猪木のテ - マ)

携帯電話が鳴つた。今度はあいちゃんだ。

「何て??」

あいちゃんなら普通にメールを送つたはずだ!!

「いや、よろしくってさ!!」

あいちゃんが画面を見るようにキティに向ける。

そこには「36歳の主婦ですが、どうぞヨロシクね!!」の文字。

「・・・ってオイ!! あいちゃん熟女がお好みだったのかよ!!」

思わずキティがつっこむ。

「俺の勝手だろ?が!!」

あいちゃんはそっけなく答えるとメールを返信し始めた。ボイラは相変わらず「ざわわ」と送り続けているし、あいちゃんは主婦とメールをし始めてしまつたし、キティは暇になつた。

チャララ - チヤラララララララ - チヤララ - (必殺仕置き人)

キティの携帯電話が鳴る。キティは固まつた。この曲は・・・・

「もつ・・・もしもし・・・」

メールでは無く電話だつた。そして・・・・

「いや・・・俺じゃないってばさ!! や・・・ちょ・・・姉ち  
やん待つてくれよ!!」

相手はキティの姉(理沙)だつた。

「姉ちゃんのプリンとか知らんてマジで!!」

キティが慌てている間にエレベータの到着音がした。エレベータ  
の中からは

「血祭りじゃオラアアア!!!!!!」

と叫ぶ女(姉)の声。そして

「おつ・・・俺は食べてないって言つてんだろお〜・・・・・ギ  
ヤアアア!!!!!!」

と悲鳴をあげる男（兄・竜也）の声。

硬直してエレベ・タ・を一心に見つめる三人。

キティはこれから降りかかるラスボス（最強）からの愛の鉄拳を想像して身震いをする。

そして思った。

- これからは出会い系なんて騒ぐ前に冷蔵庫の姉の大好物のプリンの有無を確認しよう -

楽しい青春のためにには細やかな気遣いが必要なのだった。

## 第4話 俺はRPGでは剣士だ（後書き）

はい！－！読んで下せりてありがとうございます！－！キティの家はと  
つてもスリリングで書くのが楽しいです。そんなこんなで突っ走つ  
てます作者ですが、ご意見やご感想くださつたらすごくうれしいで  
す！－！何でもかまいませんのでよろしくお願ひします！－！

## 第5話 むもむトロ・じゅんーー（前書き）

今回はキティ一家＆あこちゃん＆あこちゃん姉の団欒、そして家族愛（？ー）を描きました。皆様も家族とのツリーポケ・ションを大切に

## 第5話 むもせトロじゅん!!

「はあ・・・・・・・」

めちゃくちゃに荒らされた後のキティの部屋で俺達は溜息をつく。  
「キティの姉ちゃん相変わらずだな・・・。」

俺の言葉にボイラも頷いた。

その後・・・エレベータから悲鳴が聞こえた後、キティはマツハの速さでベッドの下に隠れた。俺とボイラはただ顔を見合わせていた。エレベータの扉が開く。一人が見たもの・・・それは恐ろしい形相をしたキティちゃんに顔がそつくりなキティ姉と某芸能人（G a t）ぐらい整つた綺麗すぎる顔で血の海に溺れるキティ兄の姿だった。

（（鬼だ・・・・・））

ボイラとあいちゃんは硬直して、震え上がった。

「どじだ・・・オラア・・・隠れてんのはわかつてんだよ・・・」  
キティ姉はゆらりと揺れるとキティの部屋の家具を全てひっくり返しだした。「出てこねえと殺すぞっ！」

キティ姉はキティ兄の首根っこを掴んだままズルズルとひきずる。まるでホラ・映画のようだ。

「今出でたら半殺しで済ませといてやんのによおーーー！」

いやいやいやだからって出でくるバカはいませんでーーー

「…………はーはー……」

出てくるバカいたあーーーつてゆづかええええーー出でくんのかよー！

！なんで？！半殺しだから？！

「あたしは約束は破んねえからよーーー」

それからのキティ姉のバイオレンスな行動は…言つまでもない。

ただ1つ言えることは、有言実行。約束どおりキティ姉は半殺しで止めた。つつか半殺しにした。

いやマジで。俺達は我が身かわいに止めに入る勇気も出ない。

あまりにも怖すぎた。その瞬間……

「理沙ちゃん!!ママがプリン食べちゃったの。でも新しいの買ってきたわよおー!!」

内線からはキティ母の声（ものすごく美人）。犯人は兄でも弟でもなかつたらしい。

一瞬考え込んだキティ姉はフンと鼻を鳴らしてキティを床に投げた。  
「わかったか!!」

明らかに意味不明。間違つても謝る気配はない。なんて姉なんだ。恐ろしい……。

そして今ここには俺とボイラと重傷者（2人）が残された。それからまもなくしてキティ兄とキティは手当てのために、かかりつけの病院に運ばれて行つた。

大惨事を目の当たりにした俺達は疲れきつて帰路についた。俺にも姉はいるが……あんな事件にはならない。なぜならばバカだから。喧嘩してもすぐ忘れる。

「ただいま」

俺が帰宅するとピンクのエプロン姿の姉が出てきた。

「おかえりい 今日は唯子特製のカレ - ON THE ライスよ」

ただのカレ - ライスだ。あきらかに。バカ丸出しだ。

俺はカレ - ができるのを待つ為にリビングのソファに座る。

「姉ちゃん、俺が姉ちゃんのプリン食ったらキレる??」

俺が聞くと姉はしばらく考えて答えた。

「ん~…焼きプリンなら怒る。めっちゃ嫌がらせする!!」

ん~…バカだな。うん。知つてたけど。そんな具体的に言われても俺、焼きプリン好きくねえし。

「じゃあ普段の生活でどんな時にキレンの??」

姉は首をかしげながら考え込む。我が姉ながら可愛らしい。いやシスコンじゃねえし!!

「太ってる友達に”アンタ痩せすぎ!! 色氣無いじゃん!!”って言われるの。お前みたいに巨乳だけど引っ込んでる所が無い体のド

「に色氣あんだよバ・カ！！（キレ）って思つから（ニコシ）」

笑顔の奥の悪意が怖い。

「あと成績の悪い友達に”アンタなんで勉強しないのに点取れるの？！“するいよね！！”って言われるの。お前とは出来が違うんだよボケが！！（キレ）つて思うから（ニシ「コ」）」  
姉ちゃん…いつも姉ちゃんじゃない…。

「へえ……」

いつもニコニコとバカ丸出しのはずが（キレ）の部分は悪意に満ち満ちている。

「だからコッソリと嫌がらせすんの。太ってる子にはおやつん時にカロリ・の高いやつ選んであげたりとか…成績悪い子にはわかつてる問題をわかんないって言つたりとか」

ストレスたまつてんだな（汗）

俺は気付いた。バカはバカでも、ただのバカと悪意をもつていてるバカがいる。

ただのバカは能天氣だが、悪意をもつたバカは意外と危ない。

俺も知らないうちに復讐されているんだろう…。こつえ…。

嗚呼、神様どうか姉ちゃんがバカを脱出できますように。ア・メン。

## 第5話 むもせトロじやん!!（後書き）

はい！すいません。遅くなりました。そして読んで下さる方々、本当にありがとうございます。皆様のおかげで花想は動いております。はい。今回なんだかグダグダになりますね。ものすごく自覚です。次回からは悔い改めハイテンションでいきますので、どうか見放さないでやって下さい。そして感想や評価など、どうぞよろしくお願いします。では、ハイテンションの修行にでも行つてしまひます！！

## 第6話 秘めた恋心（前書き）

ボイラは秘密主義。実は熱い恋心を心に秘めておりました。その相手とは…

## 第6話 秘めた恋心

「ふう・・・・・・」

朝からの溜息に妹が心配そうに俺を見る。

「ああ、ごめん。大丈夫だから」

俺はニッコリ笑うと学校へ行くために家を出た。

昨日の殺人未遂事件で疲れて帰宅後すぐに就寝したけど・・・キティ大丈夫かな？！

俺は心配していた。・・・が、3分後に俺は心配などいらなかつたことを知る。

「ボオイラア！！オハイオオオオオオー！！！」

キティだ。間違いない。このハイテンションはキティ以外にあり得ない。

キティを見ると切り傷や痣はひどいものの、骨に異常をきたすことはなかつたらしい。

しかも。痣は全部服で見えない所につけてあった。そこまで考えての殺人計画だつたのか・・・恐るべし、キティ姉。「お...おはよ

⋮

俺が挨拶を返すとキティは昨日のことなど何も無かつたように輝く笑顔を見せた。

「ところでボイラー！沖縄の子とはメールしてんのかい？？」

「あ...そういうやあ返してなかつたなあ...」

「昨日返してないけど...今日返事するよ」

俺が言うとキティはすねたように唇を尖らせた。

「いいよなあ...俺なんか誰からも返事こないままさあー」

キティ...半分死にかけたにも関わらず出会い系のことしか頭に無いのか...。

「...キティあっぱれだね！！」

本心だ。まさに『あっぱれ』の一言だ。

「お前ならわかつてくれると思つてたゼ H H H ...」

キティが抱きついてきた。

朝から男と抱擁を交わすなんて...暑苦しいキティの腕を引き離す。

「お前達...なんで朝っぱらからイチャついてんだよ。キシリオイぞ」

後ろからイケメン臭を振り撒きながら愛ちゃんが歩いてきた。

「何言つてんだよ！...愛ちゃんなんかハードガイじやろがいつ...」

キティが拳手しながら叫ぶ。

思わず周囲の人達の視線が愛ちゃんに向く。

しかし愛ちゃんは焦ることなく微笑みながら言った。

「もう見えるか??」

...まいりました！！バックに薔薇の花が見えた。

こんな綺麗な顔して微笑むのは反則だよ愛ちゃん...。

周囲の人達（老若男女問わず）は美惚れて溜め息を洩りす。

「そんな王子に乾杯！！」

キティも愛ちゃんのイケメンぶりに降参したり...。

俺は愛ちゃんを見ているとときめいてしまつ。

いや...ハードゲイではなくて...。

愛ちゃんはお姉さん（唯子ちゃん）と似ている。

一卵性双生児のようだ。

愛ちゃんを女人の体にして髪を伸ばしたら唯子ちゃんになる。

実は俺は唯子さんに恋こがれている。

読者の方々...まだ誰にも言つてないから、くれぐれも内密にお願いします。

染めてない薄い茶色の髪の毛に透き通るような白い肌。

いつ見ても自然体で柔らかな笑顔を浮かべている。

「たまらん...」

思わず心の中の言葉を口にしてしまった。

俺は慌てて周りを見回す...誰も聞いてなかつたらしい。良かつた...。

俺は愛ちゃんの横顔を眺めた（横田で）。やっぱ唯子ちゃんとやつくりだなあ...。

「何？？何がついてるか？？田やにか？？まさか鼻毛？！」

愛ちゃんは顔を隠した。

いや…別に良いんだけどさ…。

キティは愛ちゃんが顔を覆っている手を力ずくでひっぺがそつとじている。

たまらなくなつた俺は愛ちゃんに言った。

「愛ちゃん…お願いだからこれから鼻毛とか田やとかウコとか…そうゆう言葉使わないでね…」愛ちゃんはニッコリ笑つて頷いた。やつぱ王子っスよ！－！この人ヤバイっスよ！－！

キティは怪訝そうな顔で俺と愛ちゃんを交互に見つめる。

そうして俺達は、また並んで歩きだした。俺は思った。

いくら好きな女の子でも、何でも許せるって思つても…聞きたくない言葉はある。男は女に夢を持っているのだから…！

どうか神さま。

唯子さんはそんなこと言えない人であるように…俺の気持ちが届けば最高です。アーメン！－！

## 第6話 秘めた恋心（後書き）

はいー！遅くなりました（Ｔ－Ｔ）花想で「じぞこますーー」読んでくださいありがとうございましたー！今回ボイラが実は愛ちゃんの姉を好きだったというのをばらしました（笑）これからもどうぞ読んでやって下せよませ（ーー）

## 第7話 オーラとマゼンタ（前書き）

夏の恋に憧れるキティ。そんなキティに恋のチャンスが訪れる……。  
キティの運命はいかに……！

## 第7話 オイラと「マジンナ

「キテイおはよお」

学校に到着して教室の扉を開けようとした時、可愛らしい女の子の声がした。

思わず声のした方向を見ると同じクラスの竹中美代ちゃんだった。

「お…おはよ…」

美代ちゃんは一言で言つと… 小さちやー…いや俺がデカイのか？！そして良い匂いがして可愛らしくて頭が良くて… とりあえず学校のマジンナだ。

「…入らないの…？」

俺は戸惑つて硬直してしまつていた。はづ…！

「あ…いや、入るよ。うん。」

俺としたことが…突然の攻撃に不意をつかれてしまつたぜ…。

「お前ら座れ…！」

俺が席に着くと同時に担任のアービゲ男爵（命名…愛ちゃん）が怒鳴りながら入ってきた。

「今日の朝のH.Rは席替えをやるだ…！」

アービゲ男爵は「やうやく朝の礼をすると、どんなにもない」とを言い出した。

なんですか？…今俺の席は窓際の一番後ろ。一番最高な場所だ。そのおかげでやりたい放題なのに… 席替えなんかしたらどうなるかわからんじゃないか…！！！！！！

ボイラの席は真中の三番目。つまり真中の真中。愛ちゃんの席は廊下側の一番後ろ。

俺が一人見ると一人も俺を見る。

俺は即座に一人の顔から心中を読み取つた。

む〜ん…ボイラは…「俺今日の占い2位だったから後ろにけるカモ

…」てなとか。

愛ちゃんは、「ど でもこにかど動くのめんどくせ」 つと思つて  
る。

はあ…嫌だぜマジで…。

どんなに心で拒否しても、くじ引きの順番は回つてくる。

「おいメガネ！…ちやつちやと引けよ。」

俺の目の前にはくじ箱を持った…阿南恵理（ブタゴコラ） 命名…愛ちゃん）が立つている。

なんでコイツがわざわざ回つてくんだよ…! 俺はブタゴコラと皿を合わせないよう手の感触だけでくじを引いた。

「3番…」

俺は席の番号が書かれている場所を見る。

「ふつ… 一番前じゃん…！」

まだいたのかよブタゴコラ…!…自分の星に帰れよ…!…!

慌てて前の席を見る。真中の一番前…。つてオイ…!…ぜって ブタゴコラが仕組んだんだ…!…陰謀だ…!

ふとボイラを見るとボイラは「コーコー」とピ・スサインをしながら

「俺、今のキティの席だよ」

と口パクで言いやがつた。この横取りやうが…!

「むしろお前の陰謀だな…! お前がブタゴコラをよこしたんだろ？」

?

俺が立ち上がりて言うとブタゴコラがコツチを見た。田をさらして大人しくしておくことにした。

今度は愛ちゃんの方を見る。愛ちゃんは黒板をしばらく見て…寝た。いやいやいや…!…寝るのかよ…!…今から引越ししだつの…!

俺は消しゴムを投げて愛ちゃんを起こす。愛ちゃんは既に熟睡状態だった（のびた級）らしく、ものすじへ不機嫌そうにこいつを見た。

「どこになつたんだよ…?」

俺が聞くと愛ちゃんは自分の席を指差して、また寝た。

「同じなのかよ…! どんだけくじ運イイんだオイ…!」

俺はついついむ…が…愛ちゃんは気持ち良く夢の世界に旅立った。

「じゅあ一時間田までに席替え済ませとけよ！！！」

ひげ男爵は日誌と出席簿を持って、さっさと教室から出て行った。

最悪だ。俺は頬を膨らませて自分の席に移動した。

その瞬間……正しく（？…）生きてきた俺に神からの贈り物があつたことを知る。

「キティの横だあ…ようしくネッ」

俺の隣の席は…美代ちゃんだつた。

ひやああああつほつ…今ならドコまででも飛んで行けるぜ畜生…

…！

俺は理解してしまつた。神サマの意思を。

俺と美代ちゃんは結ばれる運命なんだ

輝く笑顔を振り撒きながら俺が後ろを向くと、ボイラの隣 ブタゴリラで、愛ちゃんの隣 愛ちゃんの彼女だつた。

俺はなんて運の良い青年なんだ！！！

俺は決めた…この夏は美代ちゃんと恋に溺れる…！…！…！

神様、俺と美代ちゃんの未来に幸あれ…！…！…！

## 第7話 オイラとマジンナ（後書き）

はい！－花想です！－今回はキティの恋が始動です！－しかも意中の相手はマジンナです！－これから展開は予想外になるかもしません！－楽しみにしてください！－メッセージをくれて元気を下さった皆様！－ありがとうございます！－頑張りますのでよろしくお願いします！－

## 第8話 俺と彼女の生活（前書き）

今回は愛ちゃんの眞面目な恋愛模様です。

## 第8話 僕と彼女の生活

あ……最悪だ。本当についてない。なんで俺の隣が華恵なんだ。朝のHRは席替えだつた。俺は運が良かつたのか今と同じ席になつた。

そこまでは良かつたんだ。隣の席なんて誰でも良かつたんだよ。華恵以外なら!!!!

「なんで隣に来てんだよーー！」

俺が言うと華恵は鼻で笑つた。

「知らんわ。つか嫌ならアンタ田悪いとか言つてキティと変われば??」

「つく……相変わらず憎たらしい女だ。華恵は俺の彼女だ。一応付き合つてている。

中学から付き合いだして、もう4年になる。昔は女の子だったのに

……  
「お前本当に可愛くない女だな。昔は中身だけは可愛かつたのに。」  
華恵が睨みをきかして俺を見た。

「アンタは昔から全く可愛くなかったもんねーー！」

顔が怖いので反対方向を向いて寝ることにした。

ああ……どうしていつもこうなんだろう。いつも二つも二つやつて喧嘩になるんだ。

好きなのに。好きじゃなかつたら4年も付き合つてないか。

二人の時はそれなりに素直になれるもんだけどなあ……。

「……で、あんた今日は家来るわけ??」

授業中に華恵はボソッと呟く。

「……ああ。」

俺も呟く。一人だけの会話。今だけは一人だけの世界。何故か懐かしい気持ちになる。

付き合い始めた頃の甘酸っぱくて息苦しい感覚。

「愛ちゃん！帰ろうぜ……」

放課後、キティはハイテンションにカバンを俺に渡す。ボイラも二コニコしながらカバンを持った。

俺はカバンをキティに返す。

「今日はちょっと…」

俺が言うとキティは頬をパンパンに膨らませた。

「なんだよー！イチャつき『イカよー！今晚は熱帯夜ですわネ！』！」

キティはセクシ・ポ・ズをする。「…」殺す。

「華恵ちゃんとラブ・ラブだねえ」

ボイラはフニッとした笑顔を浮かべた。「…」可愛いな。

「あ…んじやな」

キティを撲殺するのは時間は短く終わるが労力がいる。めんどくさいので、俺はカバンを持って先に帰宅している華恵の家へ向かつた。

「入れば？？」

もう通い慣れたマンションの一室。ここで華恵は一人暮らしをしている。

チャイムを鳴らすと中から華恵の声がした。

「ノド渴いた。ジュース。」

俺はいつもの俺の場所に座る。

「自分で取れよ。ウザイな。」

そう言いながら華恵は台所に向かう。まるで夫婦だな。

華恵が取ってきた口・ラを一気に流し込む。炭酸のきつさに思わずむせた。

「バカ！！ハゲ！！口・ラ!! ぼすな!!!!」

華恵が慌てて布巾を取ってきた。

俺は口・ラまみれになつた服を拭いている華恵を見る。

印象的な大きな目は黒くて長い睫に覆い被さる。こんな瞳で重くなかったらどうか。いつも思つ。

形の良い唇は薄く笑みを浮かべている。

「あんた本当にドジだよね！！」

「久しぶりにちゃんと見た。華恵の笑顔だ。無邪氣な……まるで子供のような笑み。

「……お前、実は可愛かつたんだな。」

俺が言うと華恵は赤面して俯いた。

「バツカー！今更気付いたのかよ……おっせえよ……」

そう言いながら顔を隠す華恵を抱き寄せる。

華恵は黙つて俺の胸に寄り添つた。

今わかった。きっと俺達はいつまでもこうしているんだろう。

夫婦みたいでもいいじゃないか。こんな時間がある夫婦なんて素敵だと思うから。

## 第8話 俺と彼女の生活（後書き）

はい！－遅くなりました！－しかもコメデイらしくない（Ｔ－Ｔ）  
すいませんでした…。またハイテンションに攻めていきたいと思いま  
すので…よろしくお願ひします！－！－！

## 第9話 恋のかい離れ（繪書モ）

おまたせいたしました!!

## 第9話 恋のから騒ぎ

「はあ～…」

俺は一人で家に向かつて歩いている。何故なら、キティと途中まで一緒にたのにキティがマドンナの姿を見つけて追いかけて行つたからだ。

偶然を裝つて一緒に帰るつもりらしい。家は反対方向のくせに。愛ちゃんはデートだし…なんかみんな青春してるよなあ。

「俺だつてアピールしたいのに…」

俺は足を止めた。視線の先には唯子さん。学校帰りらしく制服姿に買い物袋をさげてる。激しく萌え！！！！写真に残したい程だ。

「あれ！…ボイラッち！…今日は一人なの？？」

唯子さんは俺の姿を見ると小走りで近寄つて來た。

「あ…はい…。唯子さんは…買い物ですか？？」

「うん！…今日はビーフストロガノフってタイトルのハンバーグなの」

ビーフストロガノフとハンバーグは違う物だとわかつてはいても、あまりの可愛さに赤面してしまつ。

「良かつたらうちで食べて行かない？？家に一人ぼっちで寂しいの。

」

「あー…やばい。嬉しそぎる…！！！」

「よつ…喜んでー」

つて何居酒屋の返事みたいな事言つてるんだ俺！！

俺の戸惑いをよそに唯子さんは笑顔で家に入つて行つた。

俺も後ろをついて行く。

唯子さんは薔薇の香りを振り撒きながら鼻唄まじりに買い物袋をテーブルに置いた。

前から思つてたけど…何故にこの姉弟は薔薇の香りがするのだろう。やっぱ美形だからか！？

「あの…前から思つてたんですけど…」

この際だから聞いてみようと思つた俺は唯子さんを見る。

「ん??」

唯子さんは首をかしげた。

死。マジで。

「いや…あの…薔薇の…その…」

一瞬意識が飛んだ俺は慌てて言葉を探す。シリメツレツ。

「あ…わかつた??」

唯子さんは少し照れたように笑つた。

「ローズオイル飲んでるの。私ね薔薇が大好きだから前から飲んでるんだ!!」

ローズオイル…初めて聞いた。薔薇の油…飲めんのか…油。

「あ…薔薇嫌い??」

唯子さんは心配そうに覗きこむ。

「あ…いや全く…たまりません!!」

…ってなんでやねん…!!たまりませんって…俺何言つてんだ…!!どうしてこうなんだ…!!みんなオラに力をくれつ…!!（悟空風）

「ふふつ…ありがとつ…!!」

もう俺死んでもいい。唯子さんの笑顔を俺一人だけが見られるなんて…。

唯子さんはニーッコリ笑つてハンバーグを作り出す。

俺も慌てて手伝つた。こう見えて料理は得意なんだ…!!

「ボイラッちスゴーイ!!」

さすがの唯子さんも俺の華麗な刃捌きに興味しんしんだ。幸せ気分に浸つていると思わず指を切つてしまつた。

「痛つ…」

血が出ると同時に唯子さんは俺の手をとつた。

「大変つ…!!」

そして血が出でいる指を自分の口に持つて行つた。

「えつ…」

俺が睡然としている。唯子さんは指を口に含む。

「ローズオイル消毒だね」

唯子さんはそれだけ言つと絆創膏を取りに走つて行った。

えつと…俺の指が唯子さんの口に…「…なんじやあ…」  
やあ？！？！

顔がにやける。顔が熱い。とりあえず一生この指は誰にも触らせない。「うん。

俺がボーッとしている内に唯子さんは絆創膏を持って来た。  
そして…段差で転んだ。物凄く派手に。

「…………」「…………」

しばらく沈黙が続く。

俺は思わず唯子さんに駆け寄る。そして唯子さんはムクッと起き上がりた。

「…………」「…………」

「痛い…………」

唯子さんの田からは大粒の涙が溢れる。

「ただいま…………」

どうしたら良いかわからなくなつていると愛ちゃんが帰宅した。  
愛ちゃんは俺と泣いている唯子さんを見比べて硬直した。

「ボイラ…唯子に何をした？？」

愛ちゃんは真顔で聞く。

俺が無言で睡然としていると愛ちゃんは唯子さんの頭を撫でた。

「転んだの一」

唯子さんは子供のように泣き声を見上げる。

愛ちゃんはフウと溜め息をつくと俺の方に向き直した。

「悪いボイラ。こいつ泣きだしたら大変だから今日は…」

「あー！大丈夫だよー！俺帰るねー！」

俺は自分の荷物を持つと愛ちゃんの家を出た。

お大事に…という言葉を残して…。

星がキラキラ輝きながら俺を優しく照らす。

なんか…とりあえず…唯子さん可愛かつたな…。

いつか…いつか俺が…俺だけが唯子さんの笑顔も涙も包み込める人間になりたい。そう切実に願う。

## 第9話 恋のから騒がれ（後書き）

遅くなつて本当によいめんなさい。。。 ("ーーー) 仕事に追われながらも続きです。どうかこれからも見捨てないで下さい (ーー)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1807a/>

僕らは青春妄想族

2010年10月8日23時50分発行